

2025年8月27日(水)

専門領域別企画 | 専門領域別：【合同】体育経営管理・体育社会学

■ 2025年8月27日(水) 9:40～11:40 皿 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[1a101-03] 体育経営管理・体育社会学合同シンポジウム／部活動地域展開後の学校教育・体育を再考するーレーゾンデートルと事業構造ー

コーディネーター:清水 紀宏(筑波大学)

[経・社-S-1]

「これからの学校像」からみた学校教育／体育の再編

*本田 由紀¹ (1. 東京大学)

[経・社-S-2]

学校体育のレーゾンデートルを「再び」問う

*松田 恵示^{1,2} (1. 神戸親和大学、2. 立教大学)

[経・社-S-3]

部活動地域展開がもたらす保健体育教師へのインパクト

*野崎 武司¹ (1. 香川大学名誉教授)

専門領域別企画 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月27日(水) 10:45～11:45 皿 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1104-04] スポーツ人類学／キーノートレクチャー／能登復興に関するスポーツ人類学的考察 (能登駅伝-地域振興-震災復興)

[12人-KL-1]

能登復興に関するスポーツ人類学的考察 (能登駅伝-地域振興-震災復興)

*大森 重宜¹ (1. 金沢星稜大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：体育哲学

■ 2025年8月27日(水) 10:45～11:45 皿 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[1a1401-01] 体育哲学／浅田学術奨励賞受賞記念講演／スポーツ欲望論の可能性ースポーツにおける人間理解の1つの方法ー

司会:深澤 浩洋(筑波大学)

[00哲-KL-1]

スポーツ欲望論の可能性

スポーツにおける人間理解の1つの方法

*坂本 拓弥¹ (1. 筑波大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：発育発達

■ 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 皿 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1601-01] 発育発達／キーノートレクチャー／子どもにおける「マルチスポーツ」の現在と今後の課題

司会:佐々木 玲子(慶應義塾大学)

[07発-KL-1]

子どもにおける「マルチスポーツ」の現在と今後の課題

*河村 剛光¹ (1. 順天堂大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

■ 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 皿 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1701-01] アダプテッド・スポーツ科学／キーノートレクチャー／障害者スポーツと科学技術の交差性

司会:河西 正博(同志社大学)

[13ア-KL-1]

障害者スポーツと科学技術の交差性

*渡 正¹ (1. 順天堂大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：体育心理学

■ 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 皿 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1801-01] 体育心理学／キーノートレクチャー1／アスリートの競技体験における心理的発達

司会:中込 四郎(筑波大学)

[03心-KL-1]

アスリートの競技体験における心理的発達

*江田 香織¹ (1. 東洋大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：バイオメカニクス

■ 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 皿 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a401-01] バイオメカニクス／キーノートレクチャー／Stretch-shortening cycleのメカニズム再考

司会:伊坂 忠夫(立命館大学)

[05バ-KL-1]

Stretch-shortening cycleのメカニズム再考

*福谷 充輝¹ (1. 立命館大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：体育史

🌱 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 🏢 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a501-01] 体育史／キーノートレクチャー／植民地の身体と鍛錬—『健康朝鮮』から見えるもの—

司会:佐々木 浩雄(龍谷大学)

[01史-KL-1]

植民地の身体と鍛錬

『健康朝鮮』から見えるもの

*林 采成¹ (1. 立教大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：測定評価

🌱 2025年8月27日(水) 9:30 ~ 10:30 🏢 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a701-01] 測定評価／統計相談／体育、スポーツ科学、健康科学に関する研究で用いる各種測定方法や統計解析法

[08測-SC-1]

体育、スポーツ科学、健康科学に関する研究で用いる各種測定方法や統計解析法

*測定評価専門領域

専門領域別企画 | 専門領域別：【合同】体育経営管理・体育社会学

■ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 11:40 ■ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[1a101-03] 体育経営管理・体育社会学合同シンポジウム／部活動地域展開後の学校教育・体育を再考するーレーゾンデートルと事業構造ー

コーディネーター:清水 紀宏(筑波大学)

現在進行中の学校(運動)部活動地域展開政策は、明治期以来、長年わが国の学校教育／体育の一翼を担ってきた課外活動のトップダウン手法による強制的な縮小・廃止策でもある。しかも、教員の「働き方改革」と子どもの「少子化」という重大な社会変化への対応要請を受けた「後戻りできない」改革でもあり、新しいスポーツシステムへの本格的な改変に否が応でも向かわざるを得ないのが現況である。

こうした体育・スポーツ界全体への大きな影響を予想させる地域展開策を契機に、学校運動部に対する社会的・学術的関心も急速に再燃している。また特に、本シンポジウムを合同で企画した体育社会学及び体育経営管理専門領域では、ここ数年、運動部活動問題について様々な角度から、継続的に議論の対象としてきた。しかしその多くは、地域展開・地域移行をめぐる現状分析(効果や弊害の検証)をベースにした地域社会への円滑かつ有益な受け皿づくりに焦点化されている。即ち、部活動の地域展開に対する研究者・研究団体の目線は、営利・非営利団体による「地域スポーツ」の協同統治(ガバナンス)の構築に向かっている。

そこで本シンポジウムでは、部活動縮小・廃止という歴史的改革がもたらす「学校教育・体育」への広範なインパクトに焦点を当て、新たな学校像及び事業構造(教科内・教科外・課外)への変容、学校体育の存在意義の再検討、保健体育教師の養成(志望者の確保)・採用・研修・職業生活への影響等々の角度から学際的に議論する。

[経・社-S-1]

「これからの学校像」からみた学校教育／体育の再編

*本田 由紀¹(1. 東京大学)

[経・社-S-2]

学校体育のレーゾンデートルを「再び」問う

*松田 恵示^{1,2}(1. 神戸親和大学、2. 立教大学)

[経・社-S-3]

部活動地域展開がもたらす保健体育教師へのインパクト

*野崎 武司¹(1. 香川大学名誉教授)

専門領域別企画 | 専門領域別：【合同】体育経営管理・体育社会学

■ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 11:40 ■ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[1a101-03] 体育経営管理・体育社会学合同シンポジウム／部活動地域展開後の学校教育・体育を再考するーレーゾンデートルと事業構造ー

コーディネーター:清水 紀宏(筑波大学)

[経・社-S-1] 「これからの学校像」からみた学校教育／体育の再編*本田 由紀¹(1. 東京大学)**<演者略歴>**

東京大学大学院教育学研究科教授、日本学術会議連携会員。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士（教育学）。日本労働研究機構研究員、東京大学社会科学研究所助教等を経て、2008年より現職。専門は教育社会学。教育・仕事・家族という3つの社会領域間の関係に関する実証研究を主として行う。

日本の教育は垂直的序列化と水平的画一化が浸透している現状にある。前者は「学力」や「主体性」等による優劣の軸で児童生徒を評価する視線の充満を意味し、後者は特定の「態度」や人間像を望ましいものとして要請する圧力の充満を意味する。これらは児童生徒の出身家庭の諸資源による格差や排除を生み出すという点でも問題であり、また急増する不登校やいじめ、自殺などの要因ともなっている。これらの陰で、過少になっているのが水平的多様化、すなわち個々の児童生徒の特性や意思、感情などを尊重した自由度が高くきめ細かい学習のあり方である。水平的多様化は、単元別自由進度学習や探究学習において部分的に導入されつつある。

こうした現状理解を体育に当てはめるならば、体育もまた身体能力に基づく序列化・競争や、一斉行動および積極性の要請など教育全般の問題性を色濃く反映しており、ジェンダーとも絡み合いながら「体育嫌い」を生み出していることが指摘されている。個々の児童生徒の身体性の尊重、様々な形態で体を動かす楽しさなど、水平的多様性を取り入れたこれからの体育のあり方を実現してゆくためにはいかなる条件が必要かについて考察する。

専門領域別企画 | 専門領域別：【合同】体育経営管理・体育社会学

⌚ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 11:40 📍 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[1a101-03] 体育経営管理・体育社会学合同シンポジウム／部活動地域展開後の学校教育・体育を再考するーレーゾンデートルと事業構造ー

コーディネーター:清水 紀宏(筑波大学)

[経・社-S-2] 学校体育のレーゾンデートルを「再び」問う*松田 恵示^{1,2} (1. 神戸親和大学、2. 立教大学)**<演者略歴>**

大手前女子大学、岡山大学、東京学芸大学を経て、現在、神戸親和大学、立教大学に在職。専門は、スポーツ社会学、文化社会学。教育政策、教員養成政策、体育科教育の領域においても実践的な研究と活動を行っている。

「体育」と「学校」という教育的営みや制度の社会的評価は、常に、背景となる社会の状況との関係でなされてきた。第二次世界大戦後の日本、高度経済成長期の日本、成熟期から「失われた30年」を経た日本、そして高度情報化社会と少子高齢社会の日本など、概観すれば、そうした社会背景、ないしは広く社会構造の変化に応じて「体育」や「学校」という概念とその在り方が結局のところ結晶化している。他方で、民間の教育研究団体や学術研究が現場において切磋琢磨する実践開発から、行政主導のものと実践開発へと、大きくその発展の仕方がトレンドとして変化しつつある。また、人工知能に代表される社会構造の抜本的な変化を予見させるテクノロジーの日常化や科学技術の現代的進歩は、「体育」や「授業」という営みをより脱神格化させ民主化する反面、経験として蓄積されてきた価値や制度が問い直されないままに過去のものへと思考停止の中でオミットされることも起こっている。社会/教育/学校というベクトルではなく、遊び/スポーツ/ウエルビーイングというベクトルの中で「体育」の価値と制度を問い直したとすれば、今、有用な視座は多彩な「壁」を超える思考とか、「循環」という観点からなされる複眼性や動的認識の中に見出すことができるのではないか。そしてそれは、新しい意味での身体、あるいは「現代的な身体」の問題をめぐることにならざるをえないのではないか。より具体のレベルで、当日考えてみたい。

専門領域別企画 | 専門領域別：【合同】体育経営管理・体育社会学

■ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 11:40 ■ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[1a101-03] 体育経営管理・体育社会学合同シンポジウム／部活動地域展開後の学校教育・体育を再考するーレーゾンデトルと事業構造ー

コーディネーター:清水 紀宏(筑波大学)

[経・社-S-3] 部活動地域展開がもたらす保健体育教師へのインパクト*野崎 武司¹(1. 香川大学名誉教授)**<演者略歴>**

筑波大学大学院体育研究科体育経営学研究室修了後、香川大学教育学部、教職大学院高度教職実践専攻にて教鞭をとる。附属高松中学校校長、教育学部長、香川大学教育担当理事を歴任。最近は、体育・スポーツ研究から離れ、教職研究に従事してきた。

筆者に課されている課題は、学校部活動の地域展開がもたらす保健体育教師へのインパクトである。そのイメージを捉えるには、まず地域移行・地域展開の実態に触れる必要がある。今回は、東京都品川区（部活動は学校教育の一環）、茨城県土浦市（学校教員主導の地域展開）、長野県長野市（部活動を学校教育から分離）の三つの事例の改革の経緯を調査した。様々に相違はありながら、「部活動という価値ある重たいものを存続・発展させるための地域移行・地域展開だ！」という、改革推進の中で培われたビジョンについては共通していると感じた。この7月で地域移行を整えるという長野市においても、「今後の状況を捉え、部活動の今後のあり方、学校・教員のあり方を見直す機会としての時間があると思う」という声があった。現時点で、地域移行・地域展開後の状況を明確に捉えることはできないと言っている。

筆者の理論的立場は、コミュニケーションが<自己>と<世界>を産出する、というものである。加えて、ある強固な世界の見え方がある場合、そこにはそれを生み出す「語り口・語られ方」の堆積ともいべきディスコース（言説）が存在することとなる。今回は、学校部活動を支えてきたディスコース（例えば「部活がしっかりしていると、学校は落ち着く」、「学校教員は、部活だけでなく、教室での様子や行事などの様々な場面での子どもの様子をトータルに見て、教育に生かしている」、「競技成績ばかりでなく、子どもが中学生として成長することが第一だ、と考えるような、そんな外部指導者に、部活動の面倒を見てほしい」、「現在の部活改革は子どもを後回しにしている」等）とその背景を捉え、その揺らぎの状況（＝地域移行・地域展開が齎す保健体育教師へのインパクト）を、改革の関係者との対話の中で探していきたい。

専門領域別企画 | 専門領域別：スポーツ人類学

📅 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1104-04] スポーツ人類学／キーノートレクチャー／能登復興に関するスポーツ人類的考察（能登駅伝-地域振興-震災復興）

[12人-KL-1]

能登復興に関するスポーツ人類的考察（能登駅伝-地域振興-震災復興）

*大森 重宜¹ (1. 金沢星稜大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1104-04] スポーツ人類学／キーノートレクチャー／能登復興に関するスポーツ人類学的考察（能登駅伝-地域振興-震災復興）**[12人-KL-1] 能登復興に関するスポーツ人類学的考察（能登駅伝-地域振興-震災復興）***大森 重宜¹ (1. 金沢星稜大学)**<演者略歴>**

金沢星稜大学人間科学部教授，84口サンゼルス五輪陸上競技400mH 1600mR日本代表，シドニー・アテネ五輪代表コーチ，北信越学生陸上競技連盟会長，能登半島七尾市大地主神社宮司，スポーツ科学博士

石川県は令和6年能登半島地震による被災からの復旧・復興の象徴として「全日本大学選抜能登半島一周駅伝競走選手権大会（以下大学能登駅伝）：1968年～1977年」の再開を計画している。その目的は、地震からの復興に向け、単に被災前の姿に復元することにとどまらず、能登地域の著しい少子高齢化、過疎化、限界集落化等ももとの課題を踏まえ、未来志向に立って以前よりも良い状態を目指す「創造的復興」にある。本研究報告では大学能登駅伝の実施が復旧・復興にスポーツ、スポーツツーリズムが及ぼす効果、さらに大学スポーツ協会（UNIVAS）の理念を基とする新しい大学スポーツの在り方について大学能登駅伝を通してその在り方を検討する。

歴史的に疫病の流行、震災後に「見る一見られる」の関係から発展した散楽、猿楽、山・鉦・屋台行事、特に祭りの宝庫と称される能登半島の祭礼、神賑わいと同じく大学能登駅伝を能登半島の風流（ふりゅう）として捉え、日本遺産「キリコ祭り」の巨大キリコ舁き、UNESCO無形文化遺産日本最大の山鉦の曳行「青柏祭の曳山行事」のコロナ禍、震災による中止、廃止、またその再開が復興に及ぼす影響、機能をスポーツ人類学的視座から比較考察する。

専門領域別企画 | 専門領域別：体育哲学

📅 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

**[1a1401-01] 体育哲学／浅田学術奨励賞受賞記念講演／スポーツ欲望論の可能性
性—スポーツにおける人間理解の1つの方法—**

司会:深澤 浩洋(筑波大学)

[00哲-KL-1]

スポーツ欲望論の可能性

スポーツにおける人間理解の1つの方法

*坂本 拓弥¹ (1. 筑波大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：体育哲学

■ 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 ■ 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[1a1401-01] 体育哲学／浅田学術奨励賞受賞記念講演／スポーツ欲望論の可能性—スポーツにおける人間理解の1つの方法—

司会:深澤 浩洋(筑波大学)

[00哲-KL-1] スポーツ欲望論の可能性
スポーツにおける人間理解の1つの方法*坂本 拓弥¹ (1. 筑波大学)

＜演者略歴＞

千葉大学教育学部を卒業。東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科を単位取得退学。博士（教育学）。現在、筑波大学体育系准教授。専門は体育・スポーツ哲学。特に身体論と欲望論。著書に『体育がきらい』（筑摩書房）、近刊に『子どもたちのための体育をつくる哲学：身体・遊び・テクノロジー』（大修館書店）がある。

本講演の目的は、スポーツという現象を人間の欲望という視点から捉え、そこに浮かび上がるいくつかの論点を提示することである。具体的には、以下の3点について論じたい。

まず、受賞論文において参照した欲望論の特徴を改めて検討する。それは、フロイトによる無意識の心理学との対比を通して、ジラールの「三角形的欲望」論の位置づけを示すことであり、同時に、現代社会における人間の欲望を再考する手がかりを示すことでもある。次に、その欲望論の視点から、スポーツにおいて暴力的行為が生じる背景を探る。これは受賞論文の主題であり、なおかつ、今日もスポーツの場に現出している様々な倫理的問題にかかわる論点でもある。最後に、スポーツにおける欲望論の可能性を示したい。例えばそれは、オリンピックをはじめとした大規模スポーツイベントを巡る欲望であり、子どものスポーツを巡る大人の欲望であり、さらには、スポーツにおけるテクノロジーの導入や応用に関する我々の欲望を描き出すことである。

スポーツを巡る欲望を捉えようとする以上の試みは、人間の文化としてのスポーツが一体何であったのかを考えるための不可欠の視点を示すとともに、そこに生きる我々自身を理解するための1つの方法ともなるであろう。

専門領域別企画 | 専門領域別：発育発達

📅 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1601-01] 発育発達／キーノートレクチャー／子どもにおける「マルチスポーツ」の現在と今後の課題

司会:佐々木 玲子(慶應義塾大学)

[07発-KL-1]

子どもにおける「マルチスポーツ」の現在と今後の課題

*河村 剛光¹ (1. 順天堂大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：発育発達

📅 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1601-01] 発育発達／キーノートレクチャー／子どもにおける「マルチスポーツ」の現在と今後の課題

司会:佐々木 玲子(慶應義塾大学)

[07発-KL-1] 子どもにおける「マルチスポーツ」の現在と今後の課題*河村 剛光¹(1. 順天堂大学)**<演者略歴>**

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科出身。専門は測定評価学、スポーツ視覚学、体力学などではあるが、多くの競技種目や研究領域に興味関心があり、院生たちと研究を行っている。スポーツと視覚に関する研究からも、発育発達期の子どもの頃の多様な経験の重要性を感じ、マルチスポーツに関する研究調査にも着手。

わが国におけるマルチスポーツは、海外に比べて一般的ではない。子どもの頃に複数（マルチ）のスポーツ種目を経験して、その後に専門とする競技を選択していくマルチスポーツの考え方には利点も多い。マルチスポーツに関連した怪我・オーバーユース・燃え尽きについての報告例は一定数以上あるが、本キーノートレクチャーでは幅広く先行研究を概観し、わが国の子どものスポーツ経験に関わる我々の研究調査を含めて報告する。これまでも発育発達期には、多様な経験、多様な動きをすることが推奨されてきた。かつて我が国では、専門的に競技を行うのは中学生以降であることも多かったが、近年では子どものスポーツ環境が整ってきた影響もあり、早期に1つの競技に専門化するケースも増えた。我々の調査では、小さな頃から1つの競技種目だけに特化しなくとも、一定の競技レベルに到達することが可能であると考えられた。また、年代や競技種目による特徴の違い、競技を終えた後の（健康のための）運動習慣という観点からも検討を行ってきた。本キーノートレクチャーの最後では、これらの研究経験とレビューから、今後の研究課題として必要とされる切り口についても考えていく。

専門領域別企画 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

📅 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1701-01] アダプテッド・スポーツ科学／キーノートレクチャー／障害者スポーツと科学技術の交差性

司会:河西 正博(同志社大学)

[13ア-KL-1]

障害者スポーツと科学技術の交差性

*渡 正¹ (1. 順天堂大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

■ 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1701-01] アダプテッド・スポーツ科学／キーノートレクチャー／障害者スポーツと科学技術の交差性

司会:河西 正博(同志社大学)

[13ア-KL-1] 障害者スポーツと科学技術の交差性*渡 正¹(1. 順天堂大学)**<演者略歴>**

筑波大学大学院人間総合科学研究科単位取得退学、博士（学術）。車椅子バスケットボールのフィールドワークやパラアスリートのメディア表象など、障害者とスポーツの接点において「障害」や「スポーツ」が人々にどのような意味を持ちうるかについて社会学的検討を展開してきた。

障害者のスポーツ活動、特に身体障害者は、スポーツに参加する際に義足や車椅子などが必要であり、多くのアスリートはテクノロジーと身体を複合させて競技することが前提となっている。これらは、障害者をスポーツに包摂するための合理的配慮を可能にするテクノロジーであった。パラアスリートの身体は「サイボーグ」として表象され、近代スポーツが前提とする「自然な身体」がイデオロギー的な理想であることを指し示すものとして議論の中心にもなった。しかし、オスカー・ピストリウスやマルクス・レームはまさにその身体の「サイボーグ」性がゆえに、オリンピックへの参入が認められず排除されたのである。現代のスポーツにおいては、（パラ）アスリートはつねに、そしてすでに身体と技術の複合として存在するが、こうしたアスリートの身体とそれを支えるテクノロジーは様々に既存のスポーツ的価値・規範と対立する可能性をはらむ。

本報告では、こうしたアスリートの身体を、スポーツと科学技術の交差する場所として捉え、関連するいくつかの事例から、身体のエンハンスメントとトリートメントについて考える。こうした交差性を検討するにあたっては、科学技術社会論（STS）やエスノメソドロジー（EMCA）の視点から、科学技術がパラアスリートやパラスポーツをどのように照射し、何を射程外においてきたのかを検討し紹介する。

専門領域別企画 | 専門領域別：体育心理学

📅 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 📍 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1801-01] 体育心理学／キーノートレクチャー1／アスリートの競技体験における心理的発達

司会:中込 四郎(筑波大学)

[03心-KL-1]

アスリートの競技体験における心理的発達

*江田 香織¹ (1. 東洋大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：体育心理学

📅 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 📍 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1801-01] 体育心理学／キーノートレクチャー1／アスリートの競技体験における心理的発達

司会:中込 四郎(筑波大学)

[03心-KL-1] アスリートの競技体験における心理的発達

*江田 香織¹ (1. 東洋大学)

<演者略歴>

東京学芸大学大学院教育学研究科学学校心理学専攻修士課程修了。筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程修了。博士（体育科学）。現在、東洋大学准教授。

アスリートの心理的発達や自己形成については、古くから関心が持たれてきた。一方で、具体的にどのような体験によって彼らの心理的発達が促進されるのかという点については、十分議論されていない。競技力の向上を望めば、自ずと競技に専心する傾向が強くなり、必然的に体験内容も競技に限られていく。その中では、一般的な心理的発達過程で体験すべき体験ができないこともある。では、競技経験は心理的な発達を阻害するのだろうか。競技経験には、他では味わうことのできない特別な体験がある。特に身体を存分に扱うという点においては、他の芸術や勉強、仕事などと異なるのではないかと考えられ、そこに競技経験の独自性があり、心の成長に貢献する体験が潜んでいるのではないだろうか。本キーノートレクチャーでは、この点について、研究や事例を踏まえながら実践的な内容を提案したい。

専門領域別企画 | 専門領域別：バイオメカニクス

📅 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a401-01] バイオメカニクス／キーノートレクチャー／Stretch-shortening cycleのメカニズム再考

司会:伊坂 忠夫(立命館大学)

[05バ-KL-1]

Stretch-shortening cycleのメカニズム再考

*福谷 充輝¹ (1. 立命館大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：バイオメカニクス

■ 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 ■ 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a401-01] バイオメカニクス／キーノートレクチャー／Stretch-shortening cycleのメカニズム再考

司会:伊坂 忠夫(立命館大学)

[05バ-KL-1] Stretch-shortening cycleのメカニズム再考*福谷 充輝¹ (1. 立命館大学)**<演者略歴>**

2012年度に早稲田大学大学院スポーツ科学研究科にて博士号を取得。2013年度から日本学術振興会特別研究員 (PD)、2016年度からは日本学術振興会海外特別研究員、2018年度からは立命館大学スポーツ健康科学部の助教、現在は立命館グローバル・イノベーション研究機構の准教授。

我々が高くジャンプする時、だれもが一度しゃがみ込んでからジャンプする。これは、反動を使うとその後の運動パフォーマンスが増強することを誰もが経験的に知っているからといえる。しかし、なぜ反動によって運動パフォーマンスが増強するのかという疑問に対しては、未解明な点が残っている状態である。これまで、反動動作 (stretch-shortening cycle) による筋力増大に関しては非常に多くの研究が行われてきており、伸張反射と腱の弾性エネルギーが主要なメカニズムと考えられている。しかしながら、これらの解釈に再考を迫るようなデータも存在する。また、神経と腱を含まない単一の筋細胞においてもstretch-shortening cycleによる筋力増大が起こることは明白であるため、伸張反射と腱の弾性エネルギー以外の要因が存在する可能性は非常に高い。この要因としてはクロスブリッジ、およびタイチンが考えられている。本発表では、これらの要素を包括的に紹介し、現時点で言えること、言えないことを整理することで、今後のstretch-shortening cycleに関する研究の方向性を議論したい。

専門領域別企画 | 専門領域別：体育史

📅 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a501-01] 体育史／キーノートレクチャー／植民地の身体と鍛錬—『健康朝鮮』から見えるもの—

司会:佐々木 浩雄(龍谷大学)

[01史-KL-1]

植民地の身体と鍛錬

『健康朝鮮』から見えるもの

*林 采成¹ (1. 立教大学)

専門領域別企画 | 専門領域別：体育史

■ 2025年8月27日(水) 10:45 ~ 11:45 ■ 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a501-01] 体育史／キーノートレクチャー／植民地の身体と鍛錬—『健康朝鮮』から見えるもの—

司会:佐々木 浩雄(龍谷大学)

[01史-KL-1] 植民地の身体と鍛錬

『健康朝鮮』から見えるもの

*林 采成¹ (1. 立教大学)

<演者略歴>

1969年ソウル市生まれ／東京大学大学院経済学研究科修了（経済学博士）／ソウル大学校を経て現職／著書『飲食朝鮮——帝国の中の「食」経済史』（2019年、名古屋大学出版会）、『鉄道員と身体——帝国の労働衛生』（2019年、京都大学学術出版会）『健康朝鮮——植民地のなかの感染症・衛生・身体』（2024年、名古屋大学出版会）等

本報告の課題は「健児」・「健民」・「健兵」といった複眼的視点から植民地朝鮮における健康な身体作りを検討し、そこで見られる植民地性と近代性を論じることである。平時より植民地政府は健康な身体作りに関心を寄せ、急性感染症の発生を契機として衛生警察・衛生組合などを通じて個々人に対する身体的管理を追求した。学校では学生を対象として「保健及体位向上」を図ろうとする学校衛生が実行されるとともに、学校体育は身体活動の運動化を超えて、身体活動のスポーツ化が重視されることとなった。その一方で、工場・事業場では労働者を対象とする労働衛生はもとより、各種スポーツ活動を通じて働く身体の健康状態が重視されており、社会的にも生活環境改善だけでなく、ラヂオ体操などによる社会一般の健康増進も政策当局の主導下で進められた。とりわけ、人的不足が著しくなる戦時期になると兵隊としての動員を含めてこの目標は切実なものになっていた。そこで、健康な身体作りが全面的課題として浮上し、「健児」・「健民」・「健兵」が目指されたが、それには民族別格差を伴いながら、植民地住民に対する帝国側からの同化・統合が強調されたのである。

専門領域別企画 | 専門領域別：測定評価

■ 2025年8月27日(水) 9:30 ~ 10:30 ■ 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a701-01] 測定評価／統計相談／体育、スポーツ科学、健康科学に関する研究で用いる各種測定方法や統計解析法

体育、スポーツ科学、健康科学に関する研究に取り組む主に大学院生や若手研究者が、自身のテーマに関連した調査、測定、あるいは実験において、どのような測定項目を選択すべきか、また収集したデータをどのように客観的に分析すべきか判断に迷うことは少なくない。そこで、本学会の測定評価専門領域では、日本体育測定評価学会員の専門家が調査、測定、あるいは実験の進め方や統計解析のアドバイスができるブースを設け、誰もが気軽に相談できる場を提供する。この企画を通して、体育、スポーツ科学、健康科学の研究水準の向上を目指すと共に、ここに関わる研究者の育成と研究者間の交流を促進することを目指す。

[08測-SC-1]

体育、スポーツ科学、健康科学に関する研究で用いる各種測定方法や統計解析法

*測定評価専門領域

専門領域別企画 | 専門領域別：測定評価

📅 2025年8月27日(水) 9:30 ~ 10:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a701-01] 測定評価／統計相談／体育、スポーツ科学、健康科学に関する研究で用いる各種測定方法や統計解析法

[08測-SC-1] 体育、スポーツ科学、健康科学に関する研究で用いる各種測定方法や統計解析法

*測定評価専門領域

日本体育測定評価学会員 (Member of the Japanese Society of Test and Measurement in Health and Physical Education)

体育、スポーツ科学、健康科学に関する研究に取り組む主に大学院生や若手研究者が、自身のテーマに関連した調査、測定、あるいは実験において、どのような測定項目を選択すべきか、また収集したデータをどのように客観的に分析すべきか判断に迷うことは少なくない。そこで、本学会の測定評価専門領域では、日本体育測定評価学会員の専門家が調査、測定、あるいは実験の進め方や統計解析のアドバイスができるブースを設け、誰もが気軽に相談できる場を提供する。この企画を通して、体育、スポーツ科学、健康科学の研究水準の向上を目指すと共に、ここに関わる研究者の育成と研究者間の交流を促進することを目指す。